

# 国際バカロレアの精神に則った 人間像を学校全体で共有

## 立命館宇治 中学校・高校

立命館宇治中学校・高校は、高度な英語力と探究力を生徒に身に付けさせる中高一貫校だ。同校のIBコースは、2010年に関西の一条校として初めて国際バカロレア機構からIBディプロマプログラムの認定を受けた。国際バカロレアの精神をふまえた教育が全校で実践されている。

### 討論や発表を行う 探究型授業が中心

10月16日、高校2年生のIBコースの教室で行われていたのはビジネスの授業。この日のテーマは「雇用者の動機付け」だ。従業員の意欲が低下するケースの具体例とその理由を挙げるように教員が促すと、教室のあちこちから意見が飛び交った。時には教員に対して疑問をぶつけることもある。この授業における発言は全て英語だ。ビジネスの授業は人気が高く、クラス24人中20人が履修している。

「IBコースの在籍者は約8割が帰国生。自分の意見を述べ、討論することを躊躇しない。議論することによって、クリティカル・シンキングや異なる意見をまとめるリーダーシップのスキルを身に付けている」と東谷保裕教頭（国際教育担当）は言う。

IBコースの学びはハードだ。講義型の授業もあるが、その大部分はディスカッションやプレゼンテーション、実験などを取り入れた探究型の授業である。議論や発表の準備として、必要な知識を得るための予習や調べもの、自分の意見をまとめるといった作業を経た後に授業に臨む。通常授業の終了後、8時間目はチュータリングの時間として自習に取り組む。IBコースに

進学する際は英検準1級程度の英語力が求められるが、そのレベルに達していないまま進学した生徒は、自主学习によって英語力を向上させている。

国際バカロレア機構（IBO）はディプロマプログラム（DP）のカリキュラムを2年間で履修するように定めている。同校では、1年次を「プレIB」と位置付け、高校卒業のための必修科目の授業を行っている。ただし、DPの資格を取得するための試験は3年次の11月に実施されるため、DPの授業をスタートする時期を早め、1年次の1月からとしている。試験が終了した12月から卒業までの期間は、再び必修科目の授業を行う。学習指導要領上、一条校として卒業に必要な修得単位数74単位のうち、中高併設校において独自に設定できる学校設定科目36単位は、全てDPに活用している。

「知識の修得は家庭で行い、学校では意見を戦わせる。そうした学びを経



活発な発言が相次ぐIBコースの授業

て生徒は達成感と自信を得る。教員にはさらに先をめぐす動機付けが求められる」（東谷教頭）。

同校のIBコース在籍者は2012年11月に実施されたディプロマ認定試験で15人中12人が合格した。合格率80%は、世界の全受験者の合格率（78%）よりも高い。7人は海外の大学に、8人は国内の大学に進学。海外進学者の中には、DP認定試験で満点の45点を獲得した生徒もいる。

### 学校全体で取り組む 国際標準の教育

立命館宇治中学校・高校は、理想とする人間像を10項目に定めている。これはIBOが示す「学習者像」と一致する。同校がめざす、世界と日本の平和的発展に貢献する未来のグローバルリーダーの育成には、現代社会における答えのない問題を解決するための教育が必要だという考えから、IBOの学習者像に着目したためである。

世界で通用する学力と探究心の育成は、中学校を含む全校的な取り組みである。高校ではIBコース開設以前の2000年から、在学中に1年間の海外留学を義務付けたIMコースを設置し、英語以外の科目も英語を使って行うイマージョン授業に力を入れてき

た。探究型の学びの中で「アカデミックスキル（分析力、調査力、論述力、表現力、発表力、討論力）」を身に付けさせる授業方法はIBコースやIMコースだけでなく、普通コースでも取り入れられている。

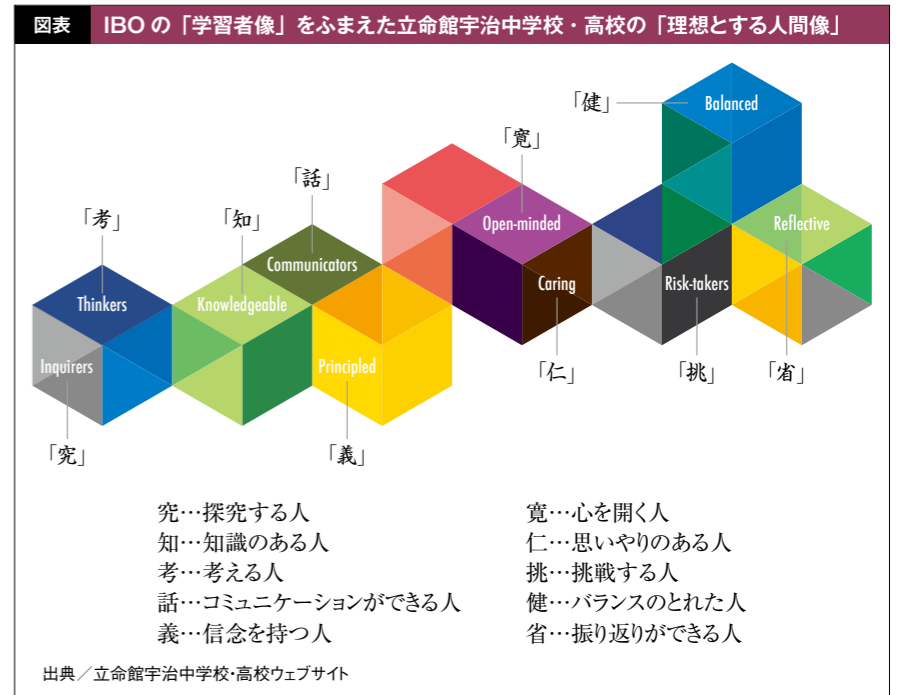
こうした授業のほかに、国際交流や異文化体験をする機会を多く設けている。例えば、2011年から毎年開催している国際高校生フォーラムには、世界10数か国から高校生が同校に集まり、グループディスカッションやスピーチ、プレゼンを行う。IBコースの生徒はこのイベントの企画運営に参加し、中心的な役割を果たす。このほかにも、全コースの生徒が海外の会議やボランティアに参加できるグローバルチャレンジプログラム制度がある。

IBコースのカリキュラムは京都という日本的な文化、歴史のある土地で活動できる点に特徴があるという。DPのカリキュラムの一つ、「CAS（創造性・活動・奉仕）」は創造的な活動やボランティアなど、教室外での活動が150時間以上義務付けられており、内容は生徒各自が独自に設定できる。生徒の中には妙心寺での禅体験や外国人向けのツアーガイド体験に取り組む者もいる。これには、国際舞台で活躍できる日本人としてのアイデンティティを醸成する意図がある。また、IBコース以外でも、サービラーニングなど、社会での経験を積む授業を用意している。

このように同校では、IBの精神を生かし、大学での学習の準備、さらには大学卒業後をもにらんだ教育に取り組んでいる。

### 教員のスキルアップと 認知度の向上が課題

立命館宇治高校の課題は、教員のさ



らなるスキルアップ、そして海外での認知度の向上だ。

IBコースには専属の教員が14人（うち日本国籍の教員は2人）いる。探究型の授業が中心となるため、担当科目の専門性に加え、生徒が課題を発見し、議論の末に解決に至るといった授業を、円滑に運営できる能力が求められる。質の高い教育を行うために教員のスキルアップは不可欠だ。海外での研修なども行われる。

同校は現在のところ、日本語DPの申請を予定していない。海外への進学を重視し、海外の大学事情に精通したカレッジカウンセラーの養成に努める考えだ。そのうえで必要なのが高校の認知度だという。「海外の大学は入学者を選ぶ際に、地域や奨学金の有無などに加えて出身高校を重視するため、高校の知名度が合否を左右することがある」（東谷教頭）からだ。

そのために校長自らが海外に向かい、高校を紹介したり、海外の大学関係者を招いたりする機会を設けている。ウェブサイトの英語化、動画での学校

紹介などにも努めている。

東谷教頭は、「日本の将来を考えるなら、教育が変わり、それを支援する社会のしくみが整うことが大切。IBは、主体性や国際人としてのマインドを育む国際標準の教育である。日本の大学にはこのことに目を向け、入試や教育の改革を進めてもらいたい」と言う。

また、「国際的に活躍できる人材に求められるのは、答えのない問題を解決する力。その力を培うIBの教育の成果は、一般入試ではなかなか測れないので、日本の大学には、IB特別入試などを検討してもらいたい。さらには、主体的な学習が行われる授業を中心とする大学教育に変わっていく必要があるだろう。海外の大学に進学するには多額の学費が必要なため、奨学金制度などの経済的な支援を社会に求めたい。今後、日本語DPの導入によりIBの教育を行う高校が増えていくのなら、認定された高校は大学と社会の期待に応える質の高い教育を行わなければならない」と話している。